



ゴリラ社会の「負け

ない論理、を考える

関野吉晴

(探検家・医師、武蔵野美術大学教授)

●せきの・よしはる

1949年東京都生まれ。一橋大学法学部、横浜市立大学医学部卒業。93年から10年をかけ、アフリカに誕生した人類が南米最南端まで辿り着いた旅路「グレートジャーニー」を踏破した。2004年から「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」を始め、2011年6月に「海のグレートジャーニー」を終えて日本に到達した。

山極寿一

(人類学・霊長類学者、京都大学理学部長・大学院理学研究科長)

●やまぎわ・じゅいち

1952年東京都生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程退学。日本モンキーセンターリサーチフェロー、京大霊長類研究所助手、大学院理学研究科助教授、同教授などを経て現職。理学博士。アフリカでゴリラの生態・社会の研究を通して人類の過去の姿を探っている。主著に『ゴリラとヒトの間』『暴力はどこからきたか』『家族進化論』など。



我々はどこへ行くのか

科学技術の発達と、それに逆襲するかのような大災害や原発事故。止まらない経済のグローバル化と環境破壊。この先いつたい人類はどこへ行くのか。この地球上で生き残れるのか……。来年三月から国立科学博物館で始まる「グレートジャーニー」展に向けて、人類の未来をテーマに関野吉晴氏が各分野の専門家と語り合う。不定期シリーズの第10回は、長年のゴリラの研究から人類の過去・現在・未来を見据えようとする山極寿一氏に登場してもらった。

関野 我々はどこから来たのか……。この二十年間続けてきた旅で、私はその道筋を辿ってきました。一九九三年からは十年間をかけて、東アフリカで誕生した人類が南米大陸にまで拡散した足跡を、自分の腕力と脚力だけで（一部はその土地の動物の力を借りて）踏破し、「グレートジャーニー」を完結させました。

次には、私たちの祖先がどのように日本列島にやって来たのかを追体験するため、二〇〇五年にシベリアから北海道に渡る「北方ルート」を、〇八年にチベッ

トから中国、朝鮮半島を経て日本列島に至る「南方ルート」を辿ってみました。そして〇九年からは、インドネシアから島伝いに沖縄に辿り着いたであろう海の道を、手作りの丸木船で旅する「海のグレートジャーニー」に乗り出し、それを三年がかりで終えたのが昨年のことです。

「我々が来た道」を辿る旅は、狩猟採集の暮らしを続ける人たちが、その土地の自然環境に寄り沿うように生きている人たちとの出会いでもありました。そしてそんな旅のなかで、私には大きな疑問が芽生えてきました。それは、文明や科学や技術や経済などの発展の果てに、我々はこれからいつどこへ行くのか、いや、人類はそもそもこの先も生き残ることができるのか、生き残れるとしたら、どんな社会や生き方を目指していけばいいのか、という根元的な疑問です。

今日は、そうしたことを考えるヒントを得るためにも、ゴリラやチンパンジーの観察から山極さんが築いてこられた自然観や世界観を伺い、人類の未来について話し合ってみたいと考えています。まず最初に、そもそも山極さんは、どんな経緯でゴリラやチンパンジーの調査を始めたのでしょうか。